平成 29 年度岩手県献血推進協議会　会議録

1　日時

平成29年12月27日(水)　午後1時30分～午後3時30分

2　場所

エスポワールいわて３階特別会議室

3 出席者

(1)　委員

望月　泉　会長、岩澤　健二　副会長、諏訪部　章　委員、石川　育成　委員
（宇部　眞一　委員代理）、宮手　義和　委員、佐々木　和延　委員
中居　賢司　委員、橋本　良隆　委員、宗形　金吉　委員、谷藤　学　委員
菅原　和彦　委員、高橋　秀幸　委員、梶田　佐知子　委員、松本　利巧　委員
中島　勝志　委員、柴柳　二郎　委員、一戸　俊行　委員、長生　正広　委員
宮川　康一　委員、西山　隆　委員（猪本　吉成　委員代理）、佐藤　博　委員
（佐藤　法之　委員代理）、大槻　英毅　委員（佐々木　辰也　委員代理）
高橋　嘉行　委員（高橋　雅恵　委員代理）
（欠席委員：鈴木　健二　委員、本田　敏秋　委員、深谷　政光　委員
荻原　禮子　委員、松田　恵美子　委員、菅原　情子　委員
吉田　一弘　委員）

(2)　事務局

保健福祉部長　八重樫　幸治、健康国保課総括課長　藤原　寿之
薬務担当課長　大坊　真紀子、主任主査　田村　剛、技師　藤村　哲雄
技師　小田　哲也
岩手県赤十字血液センター事業部長　鈴木　洋一、献血推進課長　菊池　望
推進一係長　乳井　和夫

4　会議の内容

(1) 開会

(2) あいさつ（八重樫保健福祉部長）

(3)　議事

ア　報告

平成29年度献血推進事業等の概要について（資料１　大坊薬務担当課長及び菊池献血推進課長が説明）

［質疑・意見］

（会長）高校献血実施校が平成28年度激減した理由は、400ｍｌ献血を高校側が受け難いとしたためということか。

（血液センター）高校献血については、全高校を訪問して、400ｍｌ献血ができる方には400ｍｌをお

願いしたいが200ｍｌ献血を排除するものではない、400ｍｌと200ｍｌの併用でお願いしたいと説明したが、高校からは200ｍｌ献血限定であればよいが400ｍｌ献血はできないと断られたところが多かった。また、高校献血を予定していた学校でも直前の確認で１、２人しか献血者がいなくなったため配車できなくなったところもあった。今年度も希望者が少ないとの理由で５校が中止になったが、近隣の役場に献血車を配車し生徒・教員を送迎して献血に協力してもらったり、高校の目の前が献血会場だったので高校生にも協力してもらったケースもある。

（会長）平成27年度までは200ｍｌ献血限定だったということか。

（血液センター）そのとおりである。

（会長）高校側の窓口は。

（血液センター）窓口は養護教諭の先生だが、学校長にも話を上げていただいている。

（会長）この世代に献血を体験してもらうことは大事だと思うが、最初から400ｍｌ献血はきついかもしれないので、作戦を練った方がよいのではないか。

（血液センター）28年度は400ｍｌ献血について言い過ぎ、実際は200ｍｌ献血でも受け入れる方針だったが、学校側には400ｍｌでなければだめだというイメージを植え付けてしまったと思う。来年度は、ある基準以上の生徒を対象として、必ずしも400ｍｌでなくてもよいので200ｍｌ献血を体験してください、体格がよく大丈夫な方にはぜひ400ｍｌ献血をしてくださいというように、200ｍｌ献血の裾野を広げるような説明をしていきたいと考えている。

（会長）400ｍｌ献血のメリットについては委員の皆様もご存知と思うが、輸血は一種の臓器移植である。輸血用血液の感染症はチェックしているが、未知の感染症がないという保証はない。200ｃｃの輸血というのはほとんどなく、400ｃｃ以上の輸血となることが多いが、輸血を受ける側からすれば２人より１人の人の血液を輸血した方がリスクが少ない。抗体反応することもあるので、できれば１人の人からの血液を輸血する方が医療的にも好ましいということはある。しかしこのように高校献血が減少することはいかがなものかと思う。委員の皆様からもご発言をいただきたい。

（保健体育課）400ｍｌ献血となると、男子は17歳、女子は18歳となり、女子だと献血の時期によっては３年生でもまだ18歳になっていない生徒も多く、人数が限られてくるということがある。また、献血をする時間帯が授業終了後部活前となるため、次に部活があると希望者は減るという現状がある。しかしながら、献血の必要性についての啓発は教育委員会でも重要だと考えている。200ｍｌからでも可能ということでもあるので、学校献血やセミナーの実施を今後も積極的に進めていきたい。

（会長）女子生徒にとっては最初から400ｍｌ献血は難しい面があると思うので、200ｍｌ献血を基本にしてもよいのではないかという思いもある。その辺のところをもう少し作戦を練って実施してはどうか。

（血液センター）来年度も学校訪問を行うので、市町村とも協議しながら進めたい。

（会長）高校生のうちに献血を体験することは次の献血につながることなので、そのようにお願いしたい。

（委員）３頁・４頁に「適正使用の進展により医療機関の需要が減少した」とあるが、これはどういう意味か教えてほしい。適正使用でない使用というのもあるのか。まだ適正使用が進展する余地があるのか。

（会長）私からお答えする。血漿製剤や血小板製剤は担当医師の判断によって行われる。適正使用のガイドラインが出ており、血小板が少し減少したから血小板を入れるとか、タンパク質が減ったから血漿を入れるという使い方はしてはいけないこととなっている。かつてはガイドラインがまだ浸透していない部分があった。現在では医療機関で適正使用を進めており、教育としてほぼ行き渡ったと思う。

イ　協議

・平成30年度献血目標について（資料２　菊池献血推進課長が説明）

・平成30年度献血推進計画について（資料３　大坊薬務担当課長が説明）

２件とも案のとおり承認された。

［質疑応答］

（会長）資料２の２頁下の換算率について補足するが、献血された血液は血球成分と血漿に分離される。濃厚赤血球製剤は、200ｍｌ血液からは80ｃｃ（１単位）、400ｍｌ血液からは160ｃｃ（２単位）できる。血球成分を抜いた血漿成分は凍結されて新鮮凍結血漿（FFP）とされ、400ｍｌ血液からは２単位できる。資料では医療機関が400ｍｌ血液を要望しているという書き方になっているが、１回の輸血量が80ｃｃというのは通常なく、最低２単位の輸血となる。2人の血液からよりも１人の血液からの輸血の方が抗体反応等のリスクが少ないことから、患者のことを考えて400ｍｌ血液を希望するということである。400ｍｌ献血が、そのまま400ｍｌで輸血されるのではないことを御理解いただきたい。

　人口が年々減少していくので、10代から30代の若年層献血率の数値を上げていかないと必要人数が確保できないということになり、若年層献血の目標を達成していくことが大事になる。皆様からご意見、ご質問をいただきたい。

（委員）盛岡市大通と仙台の献血ルームに行ったことがあるが、大通のルームでは平日に高校生が結構来ていたので、先ほど高校献血で希望者が少なかったという話を聞いて違和感を持った。大通の献血ルームには高校生がグループで来ているので、献血に対する意識が低いわけではないと思う。ただ、遊び感覚で来ている子もいるようだ。献血ルームのサービスが充実しているので、それを目当てに来ているような子もあり、本当にそれでよいのかなとも思った。ルームの環境整備としていろいろ記載されているが、送迎まで必要なのか。少し残念に思う。なぜ献血が必要なのかを、小中学校のころから子供たちに教えていくことが大切だと思う。

（血液センター）全くそのとおりである。普及啓発活動は今後もしっかり実施していかなければならないと思っている。日赤本部では、小中学生や高校生用のセミナーのスライドを検討しているところである。本県でも、夏休みに親子での血液センター見学会を毎年実施しており好評である。こちらからも学校にセミナー開催や献血ルーム見学を働きかけていきたい。中にはサービス目当てに来る子もいるかもしれないが、啓発に努めていきたい。

（委員）若年者については、献血ありきではなく、将来を考えて健康であることが一番大切だと考え、献血ルームでは体のこと、病気のしくみ、血液がなぜ必要かを啓発している。決してエサで釣るつもりではないことを御理解いただきたい。本日お配りしている貧血や高血圧についてのチラシを献血に来られた方にお渡しして健康管理を呼びかけている。

（会長）最近では、がん対策基本法が制定されてから、小学校でがんについての教育も行われている。献血についても授業で教えていくということも必要かもしれないと思う。

（委員）早い時期から健康に関する認識を持つことは極めて重要だと思う。

（委員）資料３の５頁にある献血推進専門員について、配置状況や活動内容を具体的に教えてほしい。また、資料３は資料２にある献血目標達成のための事業ということであるが、新たな取組や拡充する取組があれば教えてほしい。

（血液センター）献血推進専門員は県から委託を受けて血液センターが雇用する非常勤職員で、二戸・大船渡・宮古・中部保健所に駐在にしている。月10日から14日の勤務日数であるが、主にそのエリア内の献血推進業務に当たり、献血バスが来た場合にはその手伝いもしている。地元出身者で顔の広い方たちであり、積極的に取り組んでいただいている。

新たな取組としては、これまではセンター、保健所、市町村の方と皆で現場に出て、渉外活動をし、内部業務もしていたが、渉外専門の職員を各地域に指名し献血推進専門員と一緒に活動していくこととしており、成果をあげている。来年度は献血ルームをもう少し活性化させ献血者を呼び込みたいということで検討しているところである。

（会長）県の方からは何かあるか。

（健康国保課）血液製剤適正化について、昨年度研修医の啓発も必要とのご意見をいただいたところであり、これについては今年度はカリキュラムの関係で説明時間を入れてもらうことはできなかったが、来年度の研修医合同ガイダンスで資料配布等できないか、現在調整しているところである。また、高校献血については以前のように学校献血が難しい状況になってきているが、セミナーやパネル展示という形での方法により啓発に取り組んでいきたい。

（会長）今の質問は新たな取組はあるかというものだったが、いかがか。

（健康国保課）全く新規の取組というものはない。個々の取組を強化するということである。

（会長）研修医の話が出たが、医師になりたての医師に献血された血液の正しい使用法を伝えていくということはやっていくということである。

（委員）若者が必ず出席するイベントは高校卒業式と成人式の２つだと思う。県教育委員会や私立学校を所管する総務部で卒業献血の実施を学校に働きかけるのも功を奏すると思う。成人式でも市町村によって実施方法は異なると思うが、献血を行事の一環としてもらえるように市長会・町村会事務局に働きかけるべきだと思う。そこで若者が献血を経験すればその先も期待ができると見込まれると思うので、ぜひお願いしたい。

（会長）今のご意見もご検討いただければと思う。

ウ　その他

・事務局から、昨年度の協議会で若年層対策として大学関係者にも委員委嘱してはどうかとの意見が出されたことを踏まえ、次回委員改選時に大学生の献血ボランティア団体の代表者を新たに委員に委嘱することとしたい旨報告し、了承された。

・事務局から、平成30年2月16日で委員の任期が満了することと、これまでの御協力へのお礼を述べた。

(4)　閉会